

☒ 話すこと ☐ 書くこと☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☐ パフォーマンステストでの活用☒ 授業での活用
☒ 課外活動での活用☒ 家庭学習での活用実践の
ポイント

AIによる即時フィードバックと学習履歴の可視化を活用した、個別最適な学びの支援と協働的な学びを促進するファシリテーターへの教師の役割転換

実証概要

<校数>17校(小学校:7校、中学校:8校、高等学校4校)

<人数>4,533名(小学校:1,057名、中学校:2,742名、高等学校:734名)

<学年>小学校:第4、5、6学年、中学校:第1、2、3学年 高等学校:第1、2学年 <アプリ等> ECC Study Assist(株式会社ECC)

<AI機能について>生成AIを活用した、学習者の発話に応じて会話が展開する自由会話機能。AIによる会話内容・文法の評価点、アドバイス、会話の流れに合った適切な発話文、表現を広げる発話例の提示。学習履歴や会話内容が確認できる教師用管理画面。

小学校・中学校・高等学校でのAIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●個別最適と協働的学習の一体化による学びの深化

児童生徒がAIと1対1で練習することで、一人ひとりの習熟度や興味・関心に応じた学習が可能となった。AIは個々の英語力に合わせた即時フィードバック(会話内容・文法・表現の評価とアドバイス)を提供し、自分のペースで繰り返し練習できる環境を実現。個別のAI練習で得られた知識や表現を、ペアやグループでの共有活動で実践し、互いに知識を深め合いながら練習した結果、自主的に即興で意見交換をする主体的・即興的な発話に深まった。教師は個別練習と協働学習をつなぐファシリテーターとしての役割が重要になった。

●AIフィードバックの戦略的共有による言語活動の質的転換

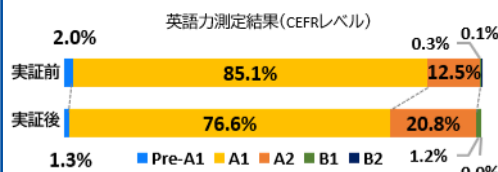
教師は、学習目標に照らしてAI会話記録と授業中の児童生徒の様子の両面から「学びの価値ある事例(豊かな表現や即興的なやり取りを継続する工夫)」を見出し、クラス全体で共有。児童生徒はこれらを言語活動に生かすことで、暗記だけに頼らず即興的に伝え合う力が育成された。



実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化

英語力測定の結果、実証後Pre-A1の生徒が減少し、A2の生徒が増加



②児童生徒の関心・意欲の変化

週2時間以上、AIを用いて英語を学習する児童が6.4%増加

学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1週間当たりどれくらいの時間、AIを用いた英語の勉強をしていますか

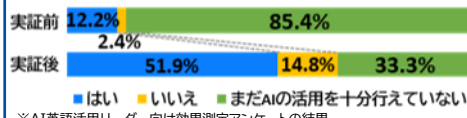


※児童向け効果測定アンケートの結果(「全くしない」の回答を除く)

③教師の指導の変化

AIを活用した指導で、英語活動の深化を実感する教師が約40%増加

AIを活用した英語でのやり取りや「書くこと」の練習、「フィードバック」を踏まえて、児童生徒の英語活動の幅や深さに変化が見られましたか



※AI英語活用リーダー向け効果測定アンケートの結果

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●公開授業と研究会による実践的リーダー育成と校内外への展開

全17モデル校で計27回の公開授業を実施し、授業後には必ず研究会を開催する体系的育成プログラムを構築した。異なる環境や学校種間での意見交換をすることで、各校の実態に即した改善策を検討。「言語活動の充実」の目標のもと、リーダー間の議論を通じて、外国人インタビューなどリアルな場面を想定した発展的活用方法が見出された。

一部のモデル校では、校内公開授業や職員会議での報告、本事業に参加していない学校や自治体レベルでの公開授業を実施し、より広範囲への普及を図った。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

●AI活用による英語教育の変革と継続的発展に向けて

最大の成果は、心理的安全性の確保により、児童生徒の積極的な発話と学習意欲が向上したことである。即時フィードバックにより「記録→見返す→次に使う」自己調整学習サイクルが確立し、個別最適な学びが実現した。教師の役割は、AIによる個別フィードバックを活用しながら、価値ある事例を選定・共有することで、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させる「学びのコーディネーター」へと発展した。今後は、実証段階で得られた知見をもとに充実させる授業デザインの普及に取り組む。